成人
SEIJIN

特集

私にとっての天理教

青年会旭日分会会報『成人』立教185年8月号

巻頭言

今回の『成人』のテーマは「自分にとっての天理教」である。
このテーマに沿って旭日分会の委員数名に寄稿してもらった。

それぞれの信仰観をうかがい知ることができて、有意義な『成人』ができあがったと感じている。巻頭言として、なぜこのテーマを選んだのかという理由について記してみたい。

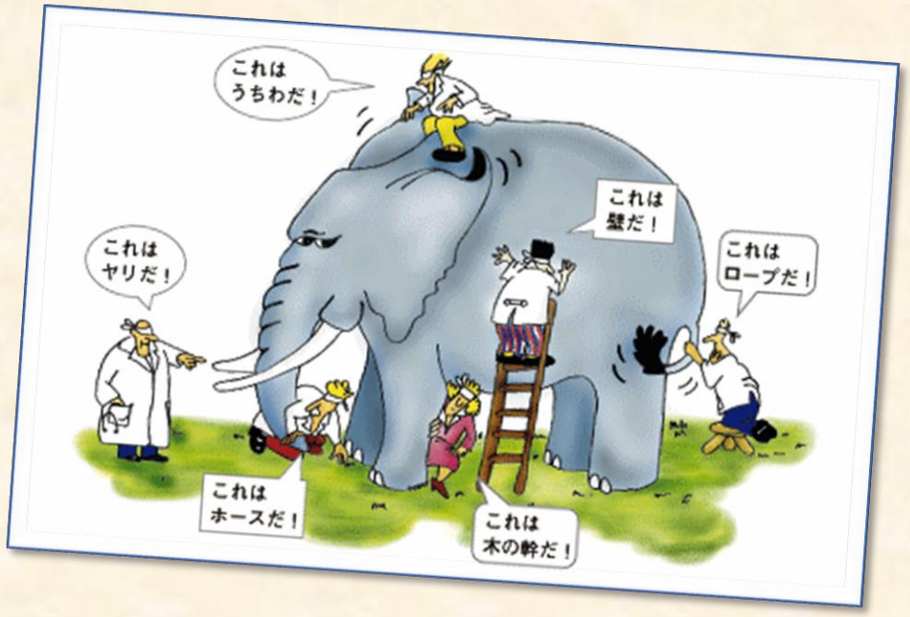
私が思うに、我々は同じ天理教を信仰していながら、同じ天理教を信仰していないのではないだろうか。

「はあ？」
「何を言ってるんだこいつは･･･」

そう思われたかもしれない。しかし、果たして我々は本当の意味で同じ天理教を信仰しているのだろうか。むしろ「それぞれの人間が「これが天理教である」と自分で理解しているものを信仰している」と表現した方がより実態に近いのではないだろうか。つまり、自分が理解している自分なりの天理教を信仰していて、それぞれが持つ「天理教像」と言うべきものは一致しないということである。

「群盲象をなでる」という有名な言葉がある。目をふさいだ複数の人が一匹の象をなでると、足を触った人は「これは木の幹だ」と答え、尾を触った人は「これはロープだ」と答え、耳を触った人は「これはうちわだ」と答え、牙を触った人は「これはヤリだ」と答える。こうした現象を指す言葉である。

つまり、触れる情報や自身の立ち位置によって、一匹の象に触れていても、人間はそれぞれに全く別の「認識」をするのである。これはあらゆることに当てはまる論理であり、信仰についても同様のことが言える。我々のように同じ青年会旭日分会という狭い集団に属する人間同士であっても、生まれた家庭や受けてきた教育、出会ってきた人物、重ねてきた経験など、自分と全く同じ人生を歩んできた人間はいないのである。そうした経験や立場の違いがそれぞれの人間にそれぞれの「天理教像」を形成させているのである。



前置きが長くなったが、今回のテーマの意図は、つまるところ「あなたの天理教に対する認識を聞かせてくれ」ということである。なぜそれを求めるかと言えば、他者の認識に触れた時に、人間は自分の意見を持つようになるからである。人の話を聞けば「なるほど。これには賛成だ」と思うこともあれば、反対に「ん？こういうことを自分は考えたことがなかったな」と思うこともあるだろう。そして、こうした他者の意見との接点において、人間は自分の認識をあらためて確認しなおすのだろうと思う。

こうして偶然にも同じ時代に旭日分会を運営していく仲間となったのであるから、こうした信仰的な談義を積み重ね、切磋琢磨しながら、徐々に「自分にとっての天理教」というものを形作っていこうではないか。そして、我々の「認識」は完全には一致しないけれども、「信仰したい天理教」「信仰せずにはおれない天理教」という点では、同じ「認識」を持って共々に勇みたいものである。青年会とは本来そういう場であると思う。

コロナの影響によってなかなか直接顔を合わせて意見交換することができにくい昨今ではあるが、こうした工夫を重ねながらお互いの成人につながる機会を少しでも増やしていきたいと思う次第である。

寄稿を快く受けていただいた委員の方々に心より感謝いたします。
誠にありがとうございました。　（松）

特集　私にとっての天理教

私にとっての天理教とはなにか

松田道和（旭東都分教会）

私にとって天理教はなにかを今回考えるきっかけをもらったので、真剣に考えてみました。

今の私にとっては定規でもあり、ヤスリのような存在でもあります。初めて天理教に向き合ったのは中学生時代です。友人の理不尽な出直しに直面し、疑問、疑念が神様へ向きました。なぜ？どうして？という感情が一気に湧いたのを覚えています。心が荒むのを周囲に出さず、内心は天理教を疑っていました。

それでも、繋がっていた理由は親や親戚が楽しく信仰を元に陽気を求めて人助けをしてくれていたからです。この時の私にとっての天理教は教えではなく、『周囲の人柄』だったんだと気づきました。

高校、大学に入ると、学生会、学修で教理を分かりやすく日常に照らした話や、天理教を通して触れる同世代の考え方に触れました。自分なりに教えに納得のいく部分が見つかり救われたような心持ちでした。それと同時に新たに疑問をもつ部分が色々と見つかりました。

一番学んだのは、疑問を疑問として心にもっておくことの大切さでした。いつか心の得心につながるその日まで、常々悟る努力をすること、少しでも神様に喜んでもらえるよう行動すること。それが信仰なんだろうなぁ。信仰者ってすごいなぁ。と感じ、自分でもきちんと信仰を生き方のベースにしてみたくなったのはこの頃です。

小さい頃から、人とのコミュニケーションが内心とても緊張するタイプなので、下手くそ、どんくさいと良くいわれますし、自負しています。後々『あんなこと言わなければ、しなければ良かったなぁ』など落ち込む私ですが、教えを定規に『今度同じことがあったらこうしてみよう！』と思えます。

人間関係で『イライラしてるなぁ』『つらいなぁ』というときはヤスリをかけるように、『だめだ、だめだ。我がふりなおすんだ。』と自分の心に磨きをかけるつもりで教えに触れるようにしています。

これからも出会いや出来事に対して、神様からの意図を考えながら、教理に触れていきたいと思います。

松田 道和（まつだ みちかず）
東京都東村山市在住。３１歳。
自教会の青年をつとめる傍ら内装業にも精を出す。趣味は映画鑑賞、こっそりと心の中で素麺かカレーの日を楽しみに待つこと。

私にとっての天理教

岡本弘道（旭日大教会）

私にとっての天理教、そう問われてまず思い浮かぶのは、生まれたときからあるもの、ということでした。私は教会長の家に生まれ、天理幼稚園から天理小学校から天理中学、天理高校と、ずっとお道の中で育ってきました。そんな私にとって天理教は、身近にありすぎて距離感をうまく測ることのできないものでした。周囲の人々もみな天理教を知っている人々でしたから、あらためて天理教について尋ねられることなどほとんどなかったように思います。

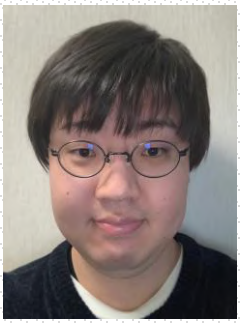
そんな自分にとって、天理教との関係を強く意識させられたのは、一般の大学に進学してからでした。そこは生まれて初めての、周りのほぼ全員が天理教を知らない環境だったのです。そこでは、天理教とはそもそも何か、ということから相手は知りません。このような相手に対して、天理教とは何かを伝えるためには、まずもって自分が天理教に対してどのように考え、理解しているのかについて自分の答えを出さなければならないように思います。

その答えは、現在も探している最中であり、出すことはできていません。大学進学後、天理教の外の友人が多くでき、ときには天理教について聞かれることはありますが、うまく答えることができず、悩むばかりです。

ただ、その中で意識している教えがあります。「なるほどの人」というお話です。天理教を信仰している者は周囲の人から「なるほどの人」と言われる人にならなければならないという教えですが、これは、自ら自分は天理教であると名乗ったり、天理教の話をしなくても、自らのふだんの行いによって周囲の人が「なるほどの人」と思っていただくことができれば、それが信仰の形であり、においがけになるのだという教えだと理解できると思います。

「私にとっての天理教」についてはまだまだ悩むばかりの自分ではありますが、日々「なるほどの人」を目指して行く中で、少しでも周囲の人に自分を通して天理教を知ってもらう、あるいは天理教についてプラスの印象を持ってもらうことが、今できる自分の信仰の形であると思い定めて過ごしていきたいと思っております。

岡本 弘道（おかもと ひろみち）
京都市在住。２８歳。
国立大学にて助教授をつとめる。
趣味は読書、最近はSF。
中国SFの「三体」がオススメです。



私にとっての天理教

庄司真人（旭日大教会）

私にとって天理教という存在は「実家」という表現が一番近い様に感じています。実家は多くの人にとって幼少期を過ごした場であり、成人した後も近くもなく遠くもない距離感で常に受け入れてくれる場であると思います。この関係性は私にとって天理教との関係性とほとんど同じだと考えています。

私は大教会の役員である父のもとに生まれ、大学生となり下宿に移るまで実家である大教会で育ちました。このような環境で育ったのにも関わらず、幼少期の自分は非常にひねくれており、元来理系的な性質を持っていたためか何一つ確かなモノを持たない宗教というものをあまり好きにはなれませんでした。こういったことを内部向けの機関誌に書くのはどうかとは思うのですが、自分にとっての天理教を書くために書いていこうと思います（笑）。

そんな自分を天理教に繋げるために父は相当苦労したと思います。しかし、そうした父の尽力というか強制力のおかげで学生生徒修養会で友人を作れたり、少ないながら大教会のイベントに参加することで、ぎりぎり繋がりを保つことが出来たのかなと感じています。

では、現在はどうなったのかというと大学院の研究室で拘束され、ほとんど青年会のイベントや各季節の行事に参加出来ておらず、おさづけも最近頂くことができたという悲惨な状況になっています。しかし、そんな状況の自分であっても定期的にイベントの参加を誘って頂けてありがたく思っています。私と天理教の関係は、本当に実家に全く帰らない息子と帰省を催促する実家のような関係になっていると思います。

家を出て成長した息子は親に恩返しすることが社会の常識とされているようなので、私もこれからは寄り添って頂いた天理教になにか恩返しできればと考えています。

庄司 真人（しょうじ まさと）
京都市在住。２２歳。
国立大学の大学院に所属。

私にとっての天理教

山村光生（道野元分教会）

私は旭日大教会の部内教会に三男として生まれました。そのため幼い頃から天理教というものは身近にあり、嬉しい時も悲しい時も教会長である父から「神様の御守護や」と言われたことを覚えています。思春期になると親と衝突することが増え、天理教自体を煩わしく思うことも増えました。当時の私は早く家を出て、将来は天理教と関わりのない生活をしたいと思っていました。

高校は両親の猛烈な勧めにより天理教校学園に入学しましたが、慣れない寮生活や先輩との上下関係に毎日嫌気がさしていました。また、学校に行っても寮に帰っても今まで敬遠していた天理教一色の生活ではストレスが溜まり続け、なんとか退学できないかという思いで頭がいっぱいでした。しかし、そんなことを思っていたのは1年生の時だけで友達が増えるにつれて少しずつ学校生活や寮生活は楽しいものに変わっていき、周囲の環境に触れる中で自分の考え方にも変化が芽生え、天理教の教えを実践することで考え方が豊かになったり、友人も増えてこの学校に入学して良かったと思うようになりました。卒業する頃にはよふぼくとしてこの先も天理教を信仰していこうと考えるようになりました。

専門学校に入学してから未信者の友人に自分の夢は陽気ぐらしの世界を実現することだと打ち明けたことがあります。世界中の人々が仲良く助け合って過ごす世界はとても幸せなんじゃないかと自分の思いを熱弁しましたが、友人は「今の生活に十分満足してるし、今のままでも幸せ」としれっと答えました。当時の自分は天理教を信仰し教えを実践することが幸せだと思っていましたが、友人のこの発言にはとても考えさせられました。世の中には天理教を信仰していなくても、例えば別の宗教を信仰していても幸せと感じる人は大勢いて、その人たちに無理に天理教を信仰してくださいと言うのはどうなんだろうという疑問が頭から離れず、授業の内容も頭に入らない上体でした。それから数年間悩んだ今の自分は天理教を信仰することはもちろん素晴らしいことだし、その教えを伝えることを怠ってはいけないと思う反面、人にはそれぞれ自分の考え方や幸せがあり、それを尊重することも同じぐらい大切なんじゃないかと考えるようになりました。このような経験から私にとって天理教は人生を豊かにするものでありながら人それぞれに捉え方があり、その考えを互いに伝え合うことで自分の人生観をより良くしてくれる教えだと思います。

山村 光生（やまむら みつお）
天理市在住。２４歳。
天理市内の総合病院にて理学療法士として勤務している。趣味はお酒を飲むこと。

私にとっての天理教

山村信也（道野元分教会）

私にとっての天理教とは、一生付き合っていくものであり、いざというときに心の拠り所になるものだと考えています。

家が教会ということもあり、天理教であることが当たり前である環境で育ってきました。小学校は地元の学校に通っていましたが、鼓笛に参加しており、子供ながらに天理教に触れていました。その後天理中学校、天理教校学園高校と天理教の学校に進学し、そこでより深く天理教に対して接することになりました。特に高校では全寮制ということもあり天理教の同級生とコミュニケーションをとる機会が多く、寮でのおつとめや部活での練習・本番を通して教理に触れることが多かったです。そうしていく中で自分でも考えを深めることが多くなっていき、その時に学んだ考え方や物事のとらえ方などは、今でも実践している部分があります。

高校の時の同級生とは今でもよく会っていますし、子供のころからやっていた鼓笛にはスタッフとして参加しており、今の自分の環境は天理教がなくては成立しないものとなっています。それらの環境はこれからも続いていくと思いますし、自分の考え方が変わってもその根本にある部分は変わらないと思っています。

また、その考え方は自分が困ったときにも頼れるものであると思っています。どうしたらいいかわからないときに自分の中で芯となるものがあるとないとでは心の持ちようが全然違いますし、それがある事によって次の一歩を踏み出せるとも思います。

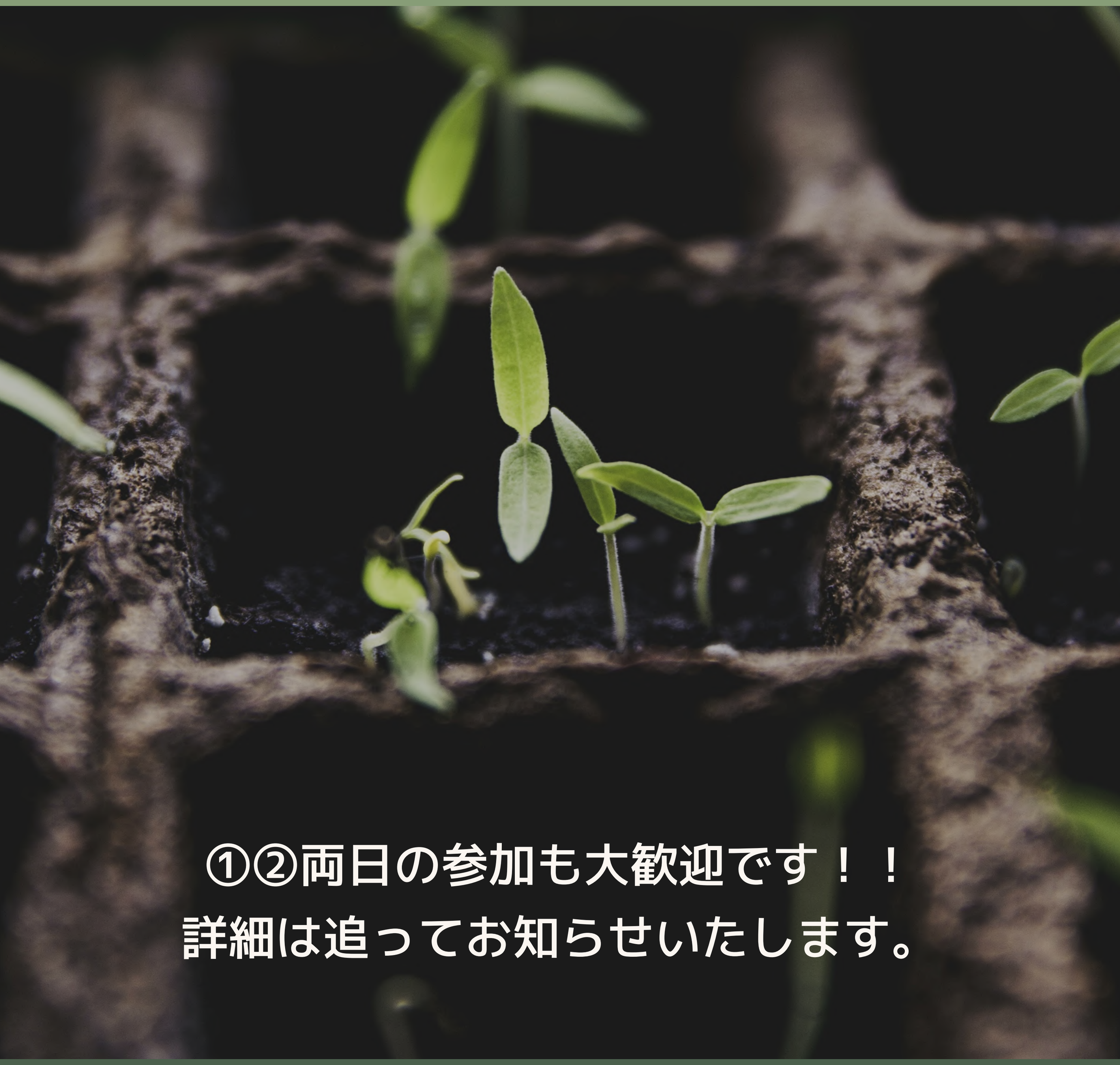
まとめますと、小さいころから様々な形で天理教に関わってきて好きな部分と好きではない部分などはありますが、自分の生活での天理教の占める割合は多く、考え方の中心であるのは間違いないですし、それはこれからも続いていくと思います。また、それがあることによってつらいことやしんどいことも乗り越えられると思っています。私にとっての天理教とはそういうものです。

山村 信也（やまむら しんや）
天理市在住。２３歳。
天理市内の総合病院に臨床検査技師として勤務する。趣味はサウナ。

青年会ひのきしんのお知らせ

①９月３日　8:00～翌8:00　@教会本部

②９月４日　9:00～翌16:00　@旭日大教会



①②両日の参加も大歓迎です！！
詳細は追ってお知らせいたします。

「屋敷は神の田地やで　蒔いたる種は皆生える」

毎月10日

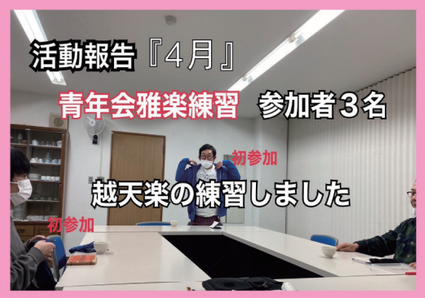
雅楽に触れてみたい。

雅楽を身につけたい。

初心者から習得を目指す。

最初の持ち物は心だけ。

《19時15分～20時30分》



毎月15日

大教会御霊祭での

奏楽・おつとめ学び。

ておどりや鳴り物、雅楽の

研鑽、上達に努める。

《10時～》

常時活動が育つ
常時活動で育つ

大教会月次祭準備ひのきしんで

神撰物や準備の段取りを学ぶ。

足を運び徳積みとしての思いを

教友と共に深めたい。

前日宿泊も大歓迎。

《朝づとめ後～》

毎月24日

青年会旭日分会では、天理教青年会の基本方針**「世界たすけへの挑戦」**と旭日大教会**「創立130周年（令和7年）に向かって成人を」**という目標に向かって活動をしていきたいと考えております。

まず一つの試みとして、大教会で毎月10、15、24日に常時活動日として活動していきます。

～POINT～
「世界たすけへの挑戦」
大教会記念祭までを見据える

① **毎月10日青年会雅楽練習**、これは雅楽初心者を対象に雅楽の習得を目指します。

② **毎月15日霊祭奏楽、おつとめ学び**、雅楽の実践的スキルアップ、おつとめのスキルアップを目指しています。

③ **毎月24日大教会月次祭準備ひのきしん**、徳積みを目的としています。

～POINT～
雅楽、神饌物組み、
おてふり、鳴り物etc…

青年で学ぶことが
皆で学べる

日々の信仰を見つめる場としてzoomを使った**トークサロン「勇」**を定時開催していきます。
「旭日若人通信」にてお知らせしています。
興味のある方は是非ご参加ください。

ひのきしんに積極的に携わり、勇ませ合い、たすけあっていきたいと思います。
ひのきしんの依頼がありましたら、青年会までお声をかけてください。

～POINT～
トークサロン「勇」
「旭日若人通信」
ひのきしん依頼

つながる とどく 毎日がかわる

青年会公式LINE

スマホのカメラを起動して
QRコードにかざしてね！

性別、年齢関係なし！
どなたでも登録OK！

青年会公式LINEはココがすごい！

登録者急増中

登録者がどんどん増加中！
企画参加でお道の仲間と
つながれる！

限定企画

LINEからしか参加できない
イベントやプレゼント企画を
開催します！

登録＝応援

様々な取り組みをシェアします。
お道の仲間の活動を応援しよう！

青年会公式LINEとは？

青年会本部が運営する公式LINEアカウントです。
「Otasuke Picks」「はたらくようぼくの集い」「仕合わせパーティー」「よろコピ」などのイベントの案内にくわえて、お道の仲間のさまざまな取り組み、LINE限定イベントの応募方法、プレゼント企画などを定期的に発信しています。登録するだけで、あなたの毎日がきっとより良いものに変わります！ぜひご登録ください。